

中國に於ける民間信仰と觀音

道 端 良 秀

廟等々）が十三處（已下略）である。

又山西省中部の祁縣内の全村五六七廟を見るに、觀音を主神とする觀音廟其他が一四五處、關帝廟が一四〇處、眞武廟が五〇處、文昌廟が四五處、天地水の三官廟が三八處、財神廟が三一處、龍王廟が十六處（已下略）である。これはいずれも昭和十七年の自分の調査によるものであるが、更に民國十九年（昭和五年）に調査された李景漢の『定縣社會概況調査』によれば、河北省定縣の八五七廟中、第一が五道廟の一五七、第二が關帝廟の一二三、第三が老母廟の一〇二、第四が南海大士廟の八〇、次が三官廟の四八、次が奶々廟の四五、次が眞武廟の四一、次が龍王廟の三二、次が玉星廟の二二、次が馬王廟の二一、次が虫王廟の二〇、次が芽王廟の一四、次が觀音廟の一三、次が三義廟の一三、次が菩薩廟の九（已下略）である。

中國に於いて都市と農村との別を問わず、或は階級や知識、貧富貴賤、老若男女等の差の如何に關わることなく、最も多くの信者を獲得しているものは觀音である。觀音の信仰こそはまさしく、中國に於ける民間信仰の王座を占むものであると言つてよい。中國に於ける民間信仰は、佛教、道教、儒教の系統に屬するものと共に、原始民族宗教の殘存するもの頗る多い、その對象神もこれ亦種々雜多と言つてよい。今これが信仰の一斑を知るために、中國に建てられている各種の寺廟を調査して見るに、山西省文水縣に於ける二五五の寺廟中觀音を祭る觀音廟（觀音菴、白衣菴、準提廟、南海大士廟、百子廟、菩薩廟）が八〇處、關羽を祭る眞武廟（玄武廟、北極宮）が二四處、文章神たる北極の星を祭る文昌宮（奎星宮、魁星宮）が一七處、龍王を祭る龍王廟（大王廟）が十四處、碧霞元君や他の色々の女神を祭る娘々廟（奶々廟、聖母廟、水母廟、西王母

更に又昭和十七年の華北宗教年鑑によつて北京城内に於ける住持の居住せる佛教道教の寺廟一〇四八處を統計して見る

に、關帝廟と名付けるもの一六九處、觀音堂、白衣菴、觀音菴等の觀音を祀る寺廟が一三已下娘々廟、眞武廟、七聖祠、火神廟、龍王廟、地藏菴等である。

さてこれによつて見るに、以上四例によつて觀音と關帝が中國に於ける民間信仰の中心をなしていることを知る。しかも觀音は女性神として、娘々神として、娘々廟に祭られている場合が多く、且つ娘々の本地は觀音なりと信ぜられてゐることを考えると、觀音の信仰はまさしく、第一位を占むるものと言ふことが出来る。尙上述の統計の内に顯著に現れてはいないが、觀音や關帝と共に、中國民衆の生活の内に浸透してゐるのは、娘々の信仰である。泰山の碧霞元君廟、北京近郊の妙峯山の娘々廟、滿州の大石橋の娘々廟ほどの天下に知られた娘々廟を初めとして、中國全土に亘つて、この娘々信仰は、深く廣く普及されてゐる。娘々廟としてだけではなく、恐らく如何なる寺廟にも女性神たる娘々神の從祀してない處はないと言つてよい。娘々と云い、娘奶と云い奶々と云い、更には王母娘々と云い、天仙聖母、天后天妃、南海大士、白衣觀音、或は送生娘々、崔生娘々等、娘々の種類も頗る多し。

而して今問題としたいのは、この民間信仰の最も主なる部分を背負つてゐる觀音信仰と、娘々信仰との交渉に就いて論を進めてみたいと思ふ。

二

先ず觀音信仰は中國に於いては甚だ古い時代、即ち法華經の譯出された佛教傳來間もない頃よりあるものであるが、この觀音信仰の系統として、凡そ五つの系統に分類される。第一は『法華經普門品』の觀音で、七難三毒を除き、三十三身を現じて一切の苦難から人々を救ひ、更に總ての願に應じて福を授け、特に玉の如き男女を思ひのままに授けると云う、觀音信仰の中心をなす思想と、第二は淨土經典による觀音で、即ち阿彌陀佛の脇侍佛とし、化佛として、念佛の行者を守り、淨土に引接せんとする觀音で、接引菩薩として、引路菩薩として、死後の淨土往生への佛としての觀音である。第三は『華嚴經入法界品』による補陀落迦山上の觀音で、いわゆる補陀山信仰である。この信仰は中國に於いては、舟山列島中の一島を以て華嚴經の補陀落山となし、觀音の淨土として、文殊の淨土たる五臺山信仰と共に、中國に於ける二大靈場として、深き尊信を集めてゐる。しかもこの補陀落山の觀音は、日本僧慧萼によつて、五臺山より勸請されたもので、補陀山信仰の始祖をなすものである。今日南海大士、慈航大士、補陀大士と呼ばれて、海上の守護神となつてゐるのは、この補陀山上の觀音なのである。

第四は眞言密教系の觀音で、幾多の密呪と觀音陀羅尼の流

行、更に多くの變化身の出現は、何れもこの系統から來てゐるものであり、金剛界胎藏界の曼荼羅によるものである。眞言密呪の不可思議なる魅力が如何にこの觀音をして一般庶民に力強く信仰せしめられてゐることか。

第五は道教系の觀音で、これは全く中國に在つて創作された、道教的觀音で經典に關係がない。例えば水月觀音、馬郎婦觀音、蛤蜊觀音の如きそれであるが、更に觀音の道教化として、觀音の娘々化を強調せねばならぬ。佛教に於ける觀音が、道教の神として、その組織の内に取入れられ、觀音娘々として、大いに尊ばれ、信仰されるに至つた。

三

次は娘々信仰と觀音信仰との交渉であるが、一體娘々とは既に多くの研究によつて知れるように、女性の尊稱語で、天子の皇后などを指し、更に女神を意味してゐる。が元來娘は少女を意味し、母の義があるが、娘々となると皇后や女性神を意味したようで、娘々神と云うことは、明らかに母性崇拜から來たものようである。従つて母性神として崇拜される神々は一應娘々神と呼ばれる得る可能性があるわけである。

ここに於いて佛教の母性神を代表する鬼子母神とか、或は女性と見た觀音菩薩の如きは、當然娘々神として信仰される素質を有している。このようにして觀音は、娘々神としての天

仙聖母、天后聖母即ち泰山娘々、天后娘々等に伍して、娘々神の一群に加えられ、觀音娘々とし、送子觀音、百子觀音、白衣大士、慈航大士などの名に於いて、最大の尊敬と信仰を勝ち得ると共に、更に娘々の本地は觀音なりと迄信仰さるるに至つたようである。元來中國に於いて娘々神と言へば、二つの大きな系統がある。一は泰山の東岳大帝の王女としての、碧霞元君即ち泰山娘々であり、一は福州蒲田縣の林愿の女として生れた天后娘々である。前者は北支那に於ける娘々神の代表として天仙聖母碧霞元君として碧霞宮に尊ばれ、後者は南支那に於ける娘々神の代表として、天后聖母と呼ばれて、天后宮に尊祀せられ、一は陸地に於いて、多くの農村社會其他からの尊信を一身に集めて、福祿壽の欲望を満足せしめて居り、一は海上交通の守護神として、貿易業者、海運業者に多くの信者を有し、海岸線にその勢力を張つてゐる。しかも兩者ともにその信仰の盛んなることは互に相譲らず、何れも古くより各々信仰され、朝廷よりの庇護も厚く、特に北宋末より益々盛んとなつて來た。しかし乍ら、このように全く別個な立場に立ち、その職域も異なる二つの娘々神も、時代の下るに従つて、次第に相寄り相融合されて、互にその信仰が混入し、南方に於いて泰山娘々廟が見られると共に、北支那に於いても多くの天后宮が設けられ、海神たる天后聖母も、總ての祈願を受ける娘々神となつて行つた。天津に於ける天

后宮も眼病治療に大いに賑いを呈するに至つた。

さてこのように娘々神には全く異つた二つの系統があつたが、この事は既に早く民間に信仰されていた觀音と大いに相似たものを見ることが出来る。即ち前に述べた法華經系の七難三毒より免れ、自由に男子を得ることの出来る觀音と、華嚴經入法界品による補陀落山の海上守護神となる觀音とである。従つてこの觀音は一は泰山娘々と同一なる性格を備え、一は天后娘々と同じ素質を有する。故にかかる娘々神が遂には觀音の化身なりと迄信仰される根據が存在する。かくして泰山娘々は觀音娘々と同一視され、等しく福祿壽の願望に應じ、送子娘々、廣生娘々、送生觀音、百子觀音、として求子の要求にも應ずることとなつた。特に中國に於ける家族制度は、子なきことは家の廢絶を意味し、子なきは大の不孝となし、子なき妻は離婚されるもので、男子出生は中國に於いては、最大の幸福であつた。従つて娘々神への最大の信仰は、出産育児方面にあつた。子きな人々に男子を授けるのが、娘々神の第一の役目であつた。法華經普門品に於ける觀音の授兒の力は、遂に娘々神の主神となつた。娘々廟に送子觀音を中心として、左右に眼光娘々と痘疹娘々とが侍立して居るのは、この事を有力に物語つている。民衆は泰山娘々に子供の授からんことを祈り乍ら、觀音さまに子を祈ると云い、白衣大士より子を授ると言つているのは、泰山娘々と觀音を同一

視し、或は本地佛と考えているようである。娘々神の後壁に、或は娘々殿の上額に佛光普照と書かれていることは、その一證左となるであろう。

又天后が海上の守護神となり、貿易商人の信仰の對象になつてゐることは、觀音の一化身たる南海大士、慈航大士と相通ずるものがある。古來より南海貿易商人の信仰の絶對神とされた觀音は、南海大士と呼ばれ、慈航普渡と書かれたが、これが海上神たる天后信仰に影響し、天后も亦觀音の一變化身と信ぜられるようになったようである。明代頃の作と思われる『玄祖真經』なる、道教を中心とした三教融合思想を述べた書の中に、文殊師利菩薩、普賢菩薩と共に、觀音菩薩を出だして、「南海岸上觀音大士慈航普渡天尊」とかかれてゐる。天尊と云うが如くここでは道教の神となつてゐるが、南海岸上觀音と言ひ、慈航普渡天尊と言ひが如きは、補陀落迦山上の觀音から來たものであり、海上守護神たる觀音の道教化である。

かくして觀音は、北方に在つては泰山娘々と白衣大士とが一つとなり、南方に在つては天后娘々と南海大士とが合して、系統の異つた二つの觀音と娘々が、それぞれ民衆の信仰の對象となつて行つた。しかし乍らこの二系統の觀音も娘々も、次第に融合されて、同一視されるようになり觀音娘々と呼ばれ、娘々神の本地は觀音であると信ずる迄に至つた。